

## [美術館員随想]

## 美術館の入館者数について

当館次長 成瀬不二雄

展覧会の企画に際し、美術館ではよく入館者数が問題となります。そして、沢山入ったときは喜び、意外に少なかったときは落胆します。そして、入館者数の多少ということが、展覧会を企画した館長や学芸員の評価につながる場合もあるようです。

ちなみに、新聞社などの事業部が企画する展覧会の場合は、採算を度外視するわけにはいきませんから、入館者数を気にするのは当然でしょう。また、経営の苦しい私立美術館も、入場料収入が多少ともふえることを願うのは当たり前でしょう。しかし、私が平常感じているところでは、最も入館者数を気にするのは、国公立の美術館のようです。現に、私のような者ですら、新任の公立美術館の館長さんから、どうしたら入館者がふえるかとよく相談を受けます。

これは至極当然のことでしょう。元来、国公立の施設は税金で設立され、運営されますから、国民、県民、あるいは市町村民によって、どれ程利用されているかということが、当然その施設を価値評価する基準となります。その場合図書館の蔵書がいかに充実しているか、あるいは美術館がいかにすぐれた展覧会を開催しても、その館の価値は利用者数にしか、形として現われてきません。国公立の博物館や美術館が、何よりも入館者数を気にするのは仕方ないことでしょう。

国公立の博物館や美術館では、よく新聞社の事業部と提携した特別展が開かれます。その大きな理由は、新聞社が海外から持ってきた展覧会などには、どうしても沢山の人が入りますし、また美術館・博物館側は新聞社本来の大きな宣伝力に期待をかけます。そして新聞社側も、いかにその組織力がす

ぐれていても、設備の整った美術館や博物館を会場としないと、よい美術品を集めた展覧会を開くことができません。たとえば、国宝や重要文化財に指定されている美術品の場合、デパートなどの臨時の施設で公開しないように文化庁は勧告しています。

そのため、新聞社の事業部などと手を組んだ展覧会が、国公立の美術館や博物館でよく開かれます。それらは概して多くの観客を集めますが、意外に少なくて、失敗に終る場合もあるようです。そこで、多くの人が入る「よい展覧会」を提供してくれるマスコミとどれだけ関係を保っているかが、館長の能力の評価につながる傾向すらあるようです。

また、一般の観客は日本や東洋の美術よりも、西洋美術（それも印象派などの近代絵画）を好みます。そして、すぐれた日本の美術品の多くが、海外に流出してしまっているという神話が、いまだに信ぜられているため、日本美術の場合は海外のコレクションの里帰り展が歓迎されます。しかし、最近では美術館が多くなり、また海外諸国が優秀な美術品の貸出しに慎重になったこともあって、新聞社側も美術館側も、多くの入館者を期待できなくなっています。

それは別として、新聞社と提携した展覧会をやっていないときに、国公立の博物館や美術館に入ってみると、観客が極端に少ないのに驚かされます。もっとも、国立博物館の場合は歴史が長く、所蔵品や寄託品の質と量にも比較的恵まれていますから、いつでもある程度入館者はいます。しかし、地方の公立美術館などは歴史が浅く、所蔵品や寄託品の質と量は劣っていることが多いのです。そこで、いわゆる「常設展」のときには、

展示場にほとんど人がいないのが現状です。もちろん、これはマスコミの騒ぐものだけに興味を持つ日本人、ここでは美術館の入館者にも問題がありましよう。しかし、新聞社と提携した展覧と常設展との大きすぎる格差は、はたして健康な状態なのでしょうか。

もちろん、国公立の美術館においても、ほとんど新聞社と提携しない特別展が開かれています。それは学芸員の日常の調査と研究に基づく展覧会として、美術館本来の姿を示すものです。この種の展覧会が次第に多くなり、また観客の共感を得られるようになったのは、喜ばしいことです。しかし、特に地方の公立美術館では、この種の展覧にも問題があるようです。

まず、館長などの幹部は、学芸員がいつもは新聞社などと提携した企画展で振り廻されているから、たまには学芸員の側に立った展覧をやらせてもよいだろうと考えます。一方、学芸員は日頃の調査や研究の成果を発表して、自分の業績としたいため、余りにも館の立場や一般観客の好みを無視した展覧会を企画する傾向がないとは言えないようです。そして、それがまた地方公立美術館の入館者がふえない一因となっています。そこで、健康な状態において美術館の入館者をふやしていくことは、なかなか難しいのです。

一方、私どもの大和文華館は規模としても、立地条件としても、新聞社と提携する展覧会を開くことには適していませんし、所蔵品の量も決して多い方ではありません。

しかし、当館はまず蒐集品が一定の質と量に達してから、建物を作って開館するという美術館の本来あるべき姿をとりました。ところが、かつての公立美術館はまず建物を作り、コレクションの充実は二の次でした。最近ではこういう傾向も大分は正されましたが、一たん開館すると、余り蒐集しない美術館もあるようです。

これに対して、大和文華館では、現在の厳しい経済状況のもとでも、親会社の近鉄の理解のため、コレクションはゆっくりとですが、確実にふえています。そこで、大和文華館へ行くと、何か新しいものが見られると期待して下さる来館者もあります。また、当館では何よりも美術品として鑑賞できるものを陳列し、それにきちんとした解説札を付け、毎週土曜日学芸員による列品解説をおこない、また展覧会に関する講演会や講座を開くという基本姿勢は守ってきたつもりです。そのため、当館の入館者は決して多くありませんが、常に一定数を確保しています。

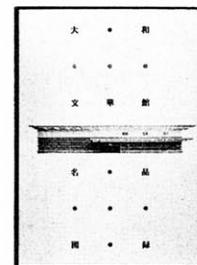
美術館の入館者をふやすために、新聞社と提携して、一時的にせよ館をにぎやかにするのもよいでしょう。また、いろいろのイベントをやることも、おいしいレストランを設けることも、また楽しいミュージアム・グッズを売ることもよいでしょう。しかし、入館者数をふやすこと、少なくともへらさないようにするには、美術館としての基本姿勢を忘れないことが、やはり一番大事ではないでしょうか。

## 新版「大和文華館名品図録」の発売中

(ご注文は当館・管理部まで)

定価3,000円(消費税90円別、送料450円)

A版、ハードカバー、184頁、掲載作品数144点。図版はすべてカラーで、それぞれに簡明な作品解説があります。英文のキャプション、データもあります。絵画51点、書蹟13点、彫刻10点、漆工15点、陶磁47点、金工6点、染織2点が収録されています。すでに、別に8分冊の「所蔵品図版目録」(発売中)があり、今回の新「名品図録」とあわせて、ご利用ください。



季刊 美のたより No.114

平成8年2月20日

発行 大和文華館